



TITLE:

<現地通信>定年前後のフィールドワーク

AUTHOR(S):

山田, 勇

CITATION:

山田, 勇. <現地通信>定年前後のフィールドワーク. 東南アジア研究
2007, 45(2): 280-294

ISSUE DATE:

2007-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53877>

RIGHT:



停年三年前

60歳の還暦をむかえた時、本格的に研究生生活のしめくくりをすべく、再決心した。それまでも実は何度も決心はしていたのではあるが、忙しさにまぎれてはおどおどしていた。60歳をむかえて、停年は目の前にみえてきた。停年までにやることは山ほどある。本の出版、海外調査のまとめ、本や書類、スライドの整理などなど。しかし、うず高く積まれたわが研究室の有様を眺めているうちに、やらなければならないという気持は、急速に力を失い、再び忙しさにまぎれて、今まで通りの生活をつづけた。

私の研究室は、ふつうのサイズよりは大きく、36㎡あり、しかも昔の建物なので天井が高い。その天井にまで、熱帯雨林のようにギッシリとモノが林立している。本棚の数にして30本をこえ、あいたすき間には、未開封の封筒や雑書類がはめ込まれている。スライドは10万枚に達し、ファイルに整理されて箱に詰め込まれている。

停年後は、このスペースはつかえない。このモノを動かす場をまず考えなければならない。先輩諸氏の経験をきくが、量がちがうのであまり参考にならない。とにかく場を確保しなければならないと、最終的に京都の北に、倉庫を建てることにした。しかし、肝心の大工さんが身内の不幸が重なり、やる気を失ってしまった。それがとれて、やっとなかなか腰をあげてもらったのが、停年1年前。冬の寒い停年3カ月前に倉庫は完成した。地元の材で60㎡のしっかりした純木造の倉庫ができた。フィールドワークの合間に学生達に手伝ってもらってモノを運び入れた。何回にもわけて、やっとふつうの人の研究室な

停年前後のフィールドワーク

山 田 勇*

みの荷物の量になり、一安心した。あとは心置きなくフィールドへ出るべしである。

停年一年前は300日くらいは出ようとひそかに決心していた。何人かの先輩が停年前はほとんどいなかったように思っていたからである。これまで行きたくても行けなかったところや、もう一度行っておきたいところなど、アイデアはいっぱいあったが、時間は限られている。一応の予定をたてて動き始めたが、その後、バンコクの駐在や、国際交流課目でタイへ学生達を連れていく役もまわってきた。最後の御奉仕として、わるくないという気持ちで、無理な予定の間にさらにギュウギュウに予定を押し込んだ。結果的には200日少しという出張になり、300日にはとても届かなかった。しかもほぼ1カ月単位で動いたため、帰国と出発の前後がやたらに忙しかった。終ってみて、こんなことは停年前の一年だけでよいと思いつつ、しかし充実した一年であったという実感もあった。

停年をおえ、今度はAPU（立命館アジア太平洋大学）で教えることになった。これまで非常勤で教えることはあったが、客員とはいえ、15回の講義を4つもつことになった。うち3つは英語である。準備に手間どったが、講義はおもしろく、かつ学生達との接触も楽しかった。4カ月をAPUで過ごし、あと4カ月は海外調査、のこりの4カ月は倉庫に運び込んだモノの整理とスライド整理にあけくれた。幸いにして名誉教授室を使うことができたので、あいている日はほとんどスライドを整理した。おかげで10万枚のスライドの分類をおえ、記録に残すべきものは、CDに焼き付けることができた。この作業には、松林さんの秘書の片岡稔子さんが、献身的な働きをしてくれた。

倉庫の方は、しかしほとんどはかどらなかった。フィールドの記録や研究会、研究項目などはすべてA4かB4のトレー箱にまとめてあり、それが400

* Yamada Isamu, 京都大学名誉教授; Emeritus Professor of Kyoto University, 28 Miyashiki-cho Hirano, Kita-ku, Kyoto 603-8365

箱ほどある。それ以外の未整理の書類はかわらず積み上げられている。40年分の雑誌のバックナンバーと内外の本など置けるところすべてに本棚をおき、整理をはじめたがまだまだ先は長い。この未整理物の山をみつつ、後悔することはなぜもっとはやくやっておかなかったかの一言である。忙しさにかまけてポイポイと積み上げていた書類が積み積みもって、かくも大きな障害となっていく。この小文を読んでおられる諸氏には是非小まめに、書類の整理を日常的にされることを願う。

さてフィールドワークであるが、当時私は6つほどの科研や21世紀COEに属していた。その中でも、もっとも大事なのは自分の科研で、4年間にわたって、環ヒマラヤ広域圏の地域間比較をおこなってきた。いつものことで、地域をひろくとりすぎたため、行くべきところの多くをカットせざるをえなかったもので、最終年だけは、これぞと思っていたところはどうしても行くように心がけた。あとから数えてみると、それでも回数にして10回しか行っていない、しかも、そのうち2回は国際会議がらみであった。これならもう少し行けたかもしれないと今になっておもったりしている。

タイの津波あと調査

まずはじめに行ったのが4月から5月にかけてのタイでのチュラロンコン大学での講義と津波の調査である。これは、かつての客員のチュラロンコン大学のピパットさんがよんでくれたもので、大学で講義をしたあと、南タイの津波の跡地を調査したのである。バンコクから車で南下し、インド洋沿いに半島部を下り、プーケットまで被害の様子をつぶさに観察した。完成間近のリゾートホテルが破壊されたり、村が根こそぎ失われたり、陸に上った船など、多くの現場をみることができた。いつもは明るいタイの人々が、家族を失い茫然自失している様子に心が痛んだ。ピパットさんは、この被災地のあとを定期的に訪れ、津波による生態系の後遺症を調べている。昔は4月から4カ月間、中国調査などへ出かけていたが、このところ4、5月には出かけなかった。この年度はじめの調査はいい出だしであった。6月には日本熱帯生態学会の15周年国際シン

ポジウムがあった。

タクラマカンとシルクロードへ

夏休みに入り、いよいよ本格的な海外調査の季節になった。できるだけ難しく、かつ遠いところをはじめに済ましておくのが鉄則なので、環ヒマラヤの残されたチベットの南部とシルクロードのこれまでいっていない地域を選んだ。四川大学と上海大学の考古学者である羅二虎さんがカウンターパートであり、ここ4年間ずっと一緒に行動している。平田君も毎年同行している。チベットの南は、これまで4年かけてみた東西北部のチベットとは違い、チベットの故郷とよばれるところである。しかし、このあたりは、国境に近いので、入ることが難しいところが多い。われわれの申請に対し、許可されたのは2割くらいの場所だけであったが、この中でチョモランマの北面の美しさに接し、かつネパール国境までの高低差の植物の重直分布をみることができた。去年につづいて、青や黄のケシを楽しむこともできたのである。

後半は、タクラマカン砂漠をよこぎり、ホータンからカシュガルへぬけ、パキスタンとの国境まで到達した。1990年にはじめて中国へ入った時、日本熱帯学会設立総会のため、どうしても帰国せざるをえず、行けなかった場へ15年ぶりに行けたのである。7,000 m級の雪山の間は、思ったほど急峻ではなかった。パキスタンからアフガニスタンへぬける日があるのはいつのことであろうかと、何年か先への希望を残して引き返し、帰りにアルタイの深部まで入ることを試みたが、道が悪化しているのをきいて断念。これもまたの機会にとっておくことにした。

この調査で一応チベット全域と、シルクロードの未調査地をカバーすることができた。環ヒマラヤプロジェクトでは西はイランまでいったが、中国とイランの間がつながっていない。またチベットの北側にはまだ入っていないので、冬にウズベキスタンに入ることにした。

パプアの人々

8月に帰国し大文字を見て、4日して再び、今度

はインドネシアへむかった。これは田中科研の「ウォーラシア海域の生活世界と環境管理の動態的研究」というテーマで、主としてスラウェシで調査がおこなわれていた。私は特別に少し梓を拡げてもらい、インドネシア側のパプアへいくことになった。名古屋市立大の赤嶺淳さんとマタラム大学のトゥリさんが同行する。われわれはスラウェシからビアク経由、パプアの首都ジャヤブラへ到着。すぐに各地の飛行機の状況から中央高地のワメナへとんだ。ここにはダニ族が標高1,500 m付近に住んでいて、われわれはここから、さらに飛行機をチャーターして、山中の小村へ入った。ここでは、地元の人々が沈香の植樹をやっており、その元締めともいべきトゥリさんが、その現場をみにきたのである。

この村は、飛行場が尾根のやや傾斜面につくられ、その前後に村があった。沈香の植林はここから30分ほど歩いた山の中である。地元の人はずぐだというが、いつものことでそれがわれわれにはこたえる。炎天下から二次林のあとへ入り、やがて沈香の植林地へ入る。列状に、数百本がかなり間をあけて植えてある。成長しているものもあれば、そうでないものもある。地元の人がトゥリさんの講習をうけてはじめてもので、その熱意がすばらしい。村の子供達もついてきて、少々足場の悪いところでは、10歳くらいの小さいペニスケースをつけた男の子が、ごく自然にわれわれの手をとってくれる。

飛行場横の宿舎へかえると、まわりの村からみな総出でみにくる。その中に一人気のふれた40歳くらいの女性がいる。話をきいてみると旦那がこの村を離れ、別の村で村長をしている。子供もつれてい

き、この人は一人になった。自分も行きたかったのに何故連れて行かなかったかと荒れ出した。そして今も飛行機がくると、乗せてくれと暴れる。そんな女性を村の人はあたたかく見守っている。あまり暴力的になると押さえ込んだりするが、よく事情がわかっているのだろう、悲しい話である。

何故か、この女性が私についてくるようになった。どこへいくにも後ろについてきて笑顔を浮かべる。多分、私がこの女性の話をきいて、気の毒とおもったことが通じたのであろうか。

夜中、大雨が降り出した。外へでてみると、縁側で、この女性が一人、白いサロンをかぶり、じっと降る雨のむこうをみていた。胸中をおもうと、実に辛い一瞬であった。

帰る日、彼女は私のまわりにさらに接近してきた。しかし、自分が飛行機に乗れないとわかると荒れ出した。女性でもこういう時はものすごい力がでる。何人かの男がとりおさえてくれ、飛行機はとびたった。今でもこの女性のことを想うと心が痛む。思い返せば、私の幼少の頃、どの町内にも一人か二人、こういう人がいた。そして町内の人には特に意識するともなく、あたたかく見守っていたようにおもう。今、そういう人を見ることは少なくなった。しかし、潜在的におかしくなりそうな人間が巷に溢れているのもかくれた事実である。進みすぎた人類の世界は、今後どうなっていくのだろうか。もっとも原初的な場でみた光景から、今の時代を生きる我々のまわりをもう一度、考え直さなければならない時がきていると感じる。

山から下り、今度は低湿地へ向った。パプアの南岸には広大な湿地帯がひろがる。メラウケからアティへ向い、沈香をみる。パプアの沈香は、カリマントンの沈香がへってきて、ここ10年ばかりの間に大きくのびた。その現場をみておきたいと考えたのである。

しかし、このあたりももうピークはすぎていた。かつては1,000戸くらいのキオスクが建ち、そこで沈香の取引をしていたという。今では店をたたんで引き返した業者も多い。切るべき木は全部切って、今残っているのは根だけである。その根を掘り起こして売っているという。

このあたりの沈香は、サゴヤシのはえる同じ湿地



写真1 パプアのダニ族の老人

にはえる。われわれはスピードボートで、近くの島へみにいく。住民が鉄棒をもってついてきて、湿地の上からつきさし、下に沈香成分があると、湿地の中へもぐってとるといふ。ドロドロの水の中へもぐって沈香部分を取り出すのは極めて重労働である。それでも地元の人はその労力をおし、まさに根こそぎとって乾かし、業者に売るのである。

カリマンタンの沈香に比べて、こちらの沈香の香りはよくないといわれていた。しかし、最近では、パプアの中にもいいものがみつかり、業者は強気である。またたとえ香りの悪いものでも、線香用には問題ないので、それを大量にとって台湾中国方面へ輸出することによって、充分商売が成り立つらしい。

われわれは南部低湿地をあとにし、ビアクからマノクワリ周辺をみて、帰国した。はじめてのパプアは大へんおもしろかったが、飛行機のチャーター代などで、これまででもっとも高かった調査であった。

バンコクオフィス駐在

9月26日から10月26日まで、バンコクオフィスの管理のため、タイへおもむいた。昔は数年単位で駐在員が交代していたが、近頃は1〜2カ月単位で人が入れ替わる。それほど皆忙しくなったともいえるし、またそれほど多くの無駄なことをしているともいえる。ともあれ、私にとっては何回目かのバンコクオフィスである。

私が1965年にはじめてバンコクへきた時、初代のオフィスがすでにあり、二階建てのオフィスには、土壌班と各地で長期滞在していた当時の若手研究者が滞在していた。留守番は福井捷朗さんで、この時に矢野暢さん、久馬一剛さん、古川久雄さんらとあった。丁度ネパールにいた探検部の吉村文成が帰ってきたので、ついたその日に寺に外泊し、田川基二先生を心配させたりした。その時は約1カ月かけ南タイから北タイまで植物採集をした。

それからオフィスは何度もかわり、スクムビット周辺の戸建てから、今はマンションになっている。日本でいうと億ションクラスの紅木で床をはった気持ちのいいマンションである。昔からのチップさ

んやアリさんはまだ健在である。この二人に会うと、古きよき時代のタイが思い出され、まるで映画の回想シーンのように昔のタイの姿がよみがえる。

かつての微笑みの国も、今では東南アジアでもっとも発展をとげた国として大きくかわってきている。バンコクには地下鉄も電車も通り、北へぬけるランシットの渋滞も立体交差で解消された。チェンマイも大きな町になり、かつての風情は失われた。かろうじて、北タイの山中には少数民族の人々ののどかな生活があった。そして、エコツーリズムが盛んとなり、現代生活に疲れた外の人を癒す場がもうけられている。

1カ月の滞在中、カンボジア国境の沈香栽培をみ、北タイをまわった。新しい大学ができて、30代の若手スタッフが中心となって元気に動いていた。後半には京大の原監事がみえ、チュラロンコンとカセツアートで会合をもった。オリエンタルの川べりで、チャオプラヤ川を行き交う船をみながら、ゆったりと語り合う時間は、昔とかわらず、タイの豊かさを感じた。タイの津波のあとをどうするかでみな研究者は新しいことを考えていた。東南ア研に留学していたソンプンは地域的な自然災害防止センターをつくるべきだと主張していた。かれの研究によると南バンコクの工場による地下水の採取によって、年々地盤が沈下し、バンコク沖のマングローブが崩壊し、累積すると莫大な土地面積が失われていっているという。一日、現場をみにいったが、確かにひどい状況にある。これまでに3回家をうつしたという海辺の漁民も将来を心配している。

津波だけでなく、近代化に伴う新たな問題が次々と起こる。ソンプンの意見に対し開発至上主義者は耳をかさない。しかし、いつかはこのシッペ返しにくるのは目にみえている。このバンコク滞在からあとも続けて海外出張が入るため、バンコクでパスポートを新しくした。日本でやるよりもはやく済んだ。バンコク滞在中に、英文の論文を3つ、本を1冊かきあげた。こんないい環境はない。

昔、NRCT（タイ国家学術調査委員会）のオフィスへいくと、係官の机の上に山のような調査申請書が積まれていた。「これ全部日本人のもの。日本人はなぜこんなにタイが好きなの」と係の女性は笑ってきく。たしかにタイを好きな人は多い。ひとつは、

カウンターパートのよさであろう。どのプロジェクトも、実によくしてくれる人がいる。私の関係ではカセツアート大学のボンサックさん、森林局のタワチャイさん、そしてチュラロンコン大学のピパットさんである。3人とも東南ア研の客員にきてもらっているが、それ以外でも綿々と長い関係がつづいている。年がいけばいくほど、こういった関係がより人間的なつながりとなっていくことがうれしい。

ヨーロッパの旅

タイから帰って4日して、今度はヨーロッパへ出発。東京外大 AA 研の内堀さんの特定研究「資源人類学」の総括班に参加させてもらっていて、その中で「環アルプス広域圏の生態資源」という名目で毎年、調査をおこなってきている。環ヒマラヤをやっている関係上、もう少し違う生態系をみたいということで、毎年1カ月ずつヨーロッパをまわっているのである。1年目はフランス、2年目はイタリアからシチリア、3年目の今年はスペイン、ポルトガルである。マドリッドでレンタカーを借り、スペインとポルトガルの主だったところをまわる。ついでにモロッコにも足をのばし、カスバの中を歩きまわる。去年のイタリアに匹敵するすぐれた建造物が多く、常にかけ足で次から次へと走りまわる。その間に、オリーブ畑の一面にひろがるゆるやかな斜面をみる。そこでかつてフィリピンへいった時、ここを征服したスペインが、このフィリピンの豊かな大地を単一作物のプランテーションにしてしまったのはスペインのもともとの文化がそうであったためであろう、とおもっていたのが、この風景をみて納得できた。根本的に土地の使い方が異なるのである。

ヨーロッパのオリーブとブドウの 방식을熱帯にあてはめたのがプランテーションである。ヨーロッパでは、この畑が人の住む町の外にひろがる。アジアのように、村と畑が混在しているようなところは少ない。明確に人と自然の間が区画されているのがヨーロッパ世界であり、その背景には一神教としてのキリスト教がある。

イタリアからスペインにかけて、すぐれたキリスト教関係の建造物が多い。どの町も中央にカテドラルと広場がある。日本の寺院とは異なり、厳然と町

の中央に君臨し、全地域を足下におさめようという力が感じられる。

ヨーロッパの町はどこも美しい。とりわけ中小都市の美しさは格別である。石畳の道もまわりには時代をへたレンガづくりの古い家々がつづく。その家々からでてくる人の顔もどこか堅苦しく、アジアの家々のようにちょっとお邪魔しようか、という雰囲気はなく、レンガのカベと頑丈な扉のむこうには別の世界が、長い歴史の中で生きつづけている。

したがって、長くこういう町にいと、息が詰まる。ヨーロッパの古都は、一日か二日楽しむだけでいい。あまり長くいと、レンガと石畳のように、こちらの顔や身体までガチガチになってしまう。

スペインでみるべきものは多いが、やはりイスラム様式の残る建築が群をぬく。イランへいった時にみたイスラム様式の名残が随所にみられ、ヨーロッパのいい建築のほとんどが根底にイスラムの影響を受けていることを知って、私は大へんうれしかった。アルハンブラ宮殿などは、その最たるものであったが、水路沿いの噴水がとめられていたため、おもったほど感動はなかった。やはり水の流れがとだえると、美しさも半減する。

私のもっとも美しいとおもったのは修道院の回廊である。正方形の中庭は芝生や木々がうえられ、そのまわりに石づくりの巾の広い回廊がある。そこを歩くだけで、別世界がみえてくる。単純な構成の中に、大きな世界があり、そこを歩む人の世界を大きく深くしていく。

ヨーロッパへいく度に訪ねる友人がいる。南ドイツでサル園をやっているワルターである。かれはバーゼル大学の学生だったころ、西ジャワのウジュンクロンへきて、一緒に時をすごして以来の友人である。学位をとり、インドネシアの自然保護の研究などをやったあと、南ドイツに設立されたサル園の園長となり、現在に至っている。本業はサルの研究者だが、かれのもっとも好きなものはジャワのワヤンである。学生時代から集めだし、現在150個のワヤンのセットを集めている。かれのサル園はハプスブルグ家の土地をかりていて、大きな農家風の建物がある。そこに、これらの箱は収められている。1箱に150～200体のワヤンが入っている。どれもこれも逸品ぞろいである。かれは収入の9割くらいを

ワヤンコレクションについやし、今や世界でももっともすぐれたワヤンの収集家である。ワヤンに関するものはワヤン本体以外何でも集める。数千個のワヤン関係の資料もふくめて、この膨大なコレクションをどうするかが問題であった。かれは来年65歳で停年をむかえる。日本のように退職金などなく、生活の道を探さねばならない。かれの兄は資産家である。イギリスで城に住み、銀行をもっている。常にかれのサポートをしてきた兄は、今回も近くの町に古い家を買った。それを修理し、下は店にかしてワルターの収入にあて、2階から5階を住居とワヤン置場にする。はじめはミュージアムをつくることを考えていたが、展示の手間と労力を考えてやめ、本を出版することになった。その第一冊目がほどなくできあがる。かれは、徹底したコリ症で、本の装丁や写真も一枚ずつ入念にチェックした。これを皮切りにコレクションの紹介をしていくという。スイスの中都市のミュージアムが、かれのコレクションの展示をおこなう話も進んでいる。

かれのやり方をみていると、徹底したスイス人の生き方を感じる。下手な妥協は一斉しない。あくまでも自分の意思を貫き通す。かれは退職と新しい家の改造、ワヤン本の出版などで大忙しの時間を送っている。

ヨーロッパの旅ではフランスの自然史博物館でオランアスリのカゴや生活文化を研究している東桂さんに大へんお世話になった。最後の年の旅については、拙文の最後にまたかくがヨーロッパは、これを皮切りに、もう少しゆっくりとまわり時間を取りたいとおもっている。晩年の一時をすごすのに古都の風情は悪くないからである。

国際会議つづけて2つ

スペインから11月20日に帰国。21日の月曜日、教授会にでて翌日からバンコクへ。第7回の京大国際シンポジウムに出席。日本の熱帯研究を中心に講演。尾池総長も出席され、盛会であった。タイの友人達と旧交をあたため、25日にはカセツアート大学林学での地域林業のシンポジウムで挨拶。ボンサックさんがモンスーン林についての基調講演をおこなう。昼から帰国。1日おいてシンガポール経由、サ

ラワクへ向う。クチンで、サラワクプロジェクトのシンポジウムである。1990年にはじまったこの研究プロジェクトも15年をへて、次々と世話する人がかわってきている。地球研の中静さんと東大の鈴木さんが今は中心になって、林冠生物学や水循環の仕事を進めている。カウンターパートも長く中心になっていたリーさんが退職し、若い人が入ってきた。かつては学生として参加した故百瀬さんや酒井さんが立派な研究者として成長し、若い学生達を指導していた。時の流れが人の顔にうつしだされて、自分の年を感じるが、若い人が育っていくのはみていて気持ちいい。

ランビルの森にとりつけられた高さ80mのクレーンにのる。すばらしく高く、美しいランビルの森が鳥瞰できる。クレーンの上でここできなくなった井上さんに線香をあげる。いつものことながら、まだかれがどこかこのあたりにいる気がしてならない。

そのあとミリの町で少し仕事をする。なじみの南海物産を扱う店へよる。主人も奥さんも元気である。二人の娘はニュージーランドで結婚してむこうにいる。この主人は1970年代に、サラワクの奥地のプナンの人々に頼んで沈香を集め、一代をきずいた人である。当時、シンガポールからやってきた業者の話にのり、数年間、精力的に集めた。まだ値は安かったが、それでも大量に沈香があった。そのおかげで、かれはミリに家と店2つ、クアラルンプールに店ひとつ、そしてニュージーランドに家をつくって、子供達はみなオークランドで教育をうけさせた。今はフカヒレやツバメの巣や様々な南海物産を扱っていて、沈香は少なくなったが、それでも南の国の物産がいかに豊かになるかが、この店にくるとよくわかる。とりわけ正月前などになると、この店の周辺は客でごったがえす。石油と木材のおかげで、ミリは豊かである。ここに住む人は金持が多い。華僑の人々を中心に、森の中のクニャー、カヤン、カダザン、イバンなどの人々が町を歩く。安ホテルの前の角の店で朝食の麺をくい、コーヒーを味わって、店の前を通る人の顔をみるのがここの私の至福の時である。サラワクには、まさに自由な雰囲気漂っている。東南アジアで今一番、島嶼部東南アジア的な町というのはこのミリではないだろうか。

あと市場と魚市場をひやかし、町を一回りして、沈香屋さんに挨拶して、クチンへもどり、リーさんと食事をしてシンガポールへ向う。

シンガポールでもやはりいくところはいつも同じ。ひとつは植物園である。ここへはじめてきたのは1965年、貧乏旅行で金が底をつき、しかもひどい下痢で一日中YMCAで寝ていたが、植物園だけは行って写真をとった。その時の写真を梅棹サロンでみせたら、梅棹さんにほめられた。次はボゴールへ留学する前の晩にここへ泊った。おばけ屋敷のような家を紹介されて、ビュービューと強風のふく一夜であった。それから何度足を運んだことだろうか。植物園も美しくなった。今回は標本庫に入り、沈香の種の標本の写真をとった。丸いドームのような古い収蔵庫はこの年を最後に、新しい建物にうつることになる。

旧空港の近くに倉庫群があり、ここで沈香を扱う業者が10数軒ある。ここも20年近い付き合いである。大きなトレーラーがとまる倉庫のガレージからコンテナがおろされフォークリフトで次々とモノが下ろされる。私がいく店は順番がきまっていて、二階の端からはじめる。ここはもっとも長い付き合いで、むこうも忙しい合間をぬって話をしてくれる。ワシントン条約のおかげで、いささかみな元気がない。資源も限られるので、そろそろ転職も考えているという。あとの店もみな同じで、元気がない。しかし倉庫にはうず高く沈香が積まれている。安物ばかりでいいモノがこないという。昔スーパーといわれた真っ黒で重い最高級品は少なくなったし、値も高くなった。アラブの方も戦争であまり調子はよくない。パプアからの品も入ってきているが、湿地でとれたものであるため、ここでもう一度乾かして処理をする。一応全部の店をまわったが、今回はみな元気がなかった。全体の風潮としてはこれもやむをえない。

あとはアラブ街やタングリンをみて、夕食を郭さんととる。かの女は東南ア研で学位をとり、シンガポールで同じ京大で博士号をとったご主人と結婚し一緒にくらしている。ご主人は情報系の研究員であるが、地域研究はシンガポールでは難しく、結局かの女は日本語学校を開き、日、英、中国語を教え、2カ所に教室を開くようになる。さらに雲南料理店を

開く。これをすべて独力でやり、その間に2人の子供をもうける。実にすばらしい女性である。われわれ夫婦はかの女の結婚式の時、家内の手作りのウェディングケーキをもって参列し、祝辞を述べたこともあって、自分の娘のようにおもっている。どうなるにせよ、これから先が楽しみな人物である。

短いながら充実した1週間を過ごし、夜行便で帰国した。今回ひとつ新しい思い出ができたのは、クチンにすむ酒井さんとのエキスカンションである。彼女は若くしてボルネオへわたり、クチンで日本料理店、旅行エージェントなどを開く。クチンへくる日本人の世話をし、ランビルの関係者も大へんお世話になった。かの女が自分でエコツアーの場もち、植林などもおこなっていて、そこをみにいったことが大きな印象となって残っている。夜はかの女のスナックでのむ。高知大の桜井さんがピアノを半分ねむるような格好でくわえタバコでひく。かれは本来ならピアニストになっていたような人物であり、タイでもクチンでももっともてる好男子である。学長補佐もやっている超多忙な日本での生活の休養をピアノをひくことでとっているのであろう。

これで停年の年度の12月までの予定は終了した。あとは、3月末までの3回の出張である。

タスマニア・ニュージーランドへ

正月2日、恒例のパーティ、客員や東南ア研関係の若い人々ら20人ほどきてくれる。この会も今年で最後になるかもしれないとおもうといささか寂しい。毎回20種ほどの料理をつくる家内も大へんであるが、おわるとやはりホッコリとし、やってよかったという気になる。正月のあとは4月から教えるAPUのシラバスづくり。

これまで、オーストラリア方面は一度いったきりである。森林という見地からすれば、タスマニアとニュージーランドは温帯多雨林の一方の極として、すばらしい森林がみられる。一度みておきたいと思いつつ、他の地域をみるのに忙しく、のびのびになっていたのが、やっと停年間際になって実現した。今回は小林繁男さん代表の「人間の安全保障」の一環として、タスマニアの西半分とニュージーランドの大森林帯をみることになった。

シンガポール経由機内泊でメルボルンへとぶ。早朝につき、少し町を歩く。こじんまりとした歩きやすい町である。中華街や歴史博物館をみる。昼すぎの飛行機でタスマニアの南端のホバートへつく。パタゴニアの町と似た冷涼感のただようさわやかな町である。レンタカーをかり、翌日から島の西を中心にまわる。

タスマニアは小さな島だが大きな森がアチコチにのこる。特に西半分は、ほとんどが国立公園に指定され、つぎつぎといい森がでてくる。これまでユーカリの森というのはあまり高く評価していなかったが、ここへきて、そのすばらしさにうたれる。やはり本場で本物をみると印象は随分と違うものである。初日は走りすぎて夜になり、宿がない。やむなく、もときた道をもどってやっと森の中に一軒みつける。

翌朝おきると部屋の前にクジャクが2羽いるのにびっくりする。まわりも森で快適である。この日はセントクレア湖国立公園から、ドナギスの展望台、ネルソン滝、ヘンテイのモレーンをみる。その翌日はクレドール国立公園周辺、南極ブナの大木に接する。南極ブナは、パタゴニア、パプアニューギニア、そしてここタスマニアやニュージーランドにある美しい木である。日本のブナよりも葉が極端に小さいが木は堂々と大きい。私は南半球ではこの樹種を求めて歩いている。世界中でもっとも好きな木のひとつである。この木とユーカリの大木を求め3日間、タスマニアの森をいきかう。道があれば入り、歩道があれば歩き、ゆっくりと大木の下で休んで写真をとる。大木の樹皮にふれ、数百年をへた木の魂を感じる。

タスマニアのいいところは人が少ないことである。たまに数人の人とあうくらいで、団体にあうことはまずない。その分ゆっくりと森を楽しむことができる。借りたのは小さな普通車のレンタカーであるが、充分どこへでも入っていける。ヨーロッパでは夜おそくまで走ってもめし屋はどこでもあいていたが、こちらは事情が違う。6時をこえと、走っている車も少なくなり、8時にはほとんどのレストランが閉まってしまう。ホテルも遅く行くとあいていない。それ以外はきわめて快適に旅をすることができる。タスマニアはもう一度ゆっくりとくるべし

と、今回は1週間弱の滞在で、西半分をほぼ全域まわり、ニュージーランドへ向った。

オークランドでは空港でレンタカーを借り、すぐ北へ向かった。北島の北の半島部には、世界に冠たるカウリの森がある。カウリはアガティスの仲間であり、東南アジアから大洋州そしてニュージーランドにかけて分布する。高さはそれほどでもないが、直径数メートルの巨大木が残っている。町へ入ると時間がかかり、道もわからなくなるので、とりあえずは北のワイポウアのカウリ林をみる。ここには4本の大木があり、そのうちの1本、テマトウアガヘレは、幹周囲が16.41 mと大きい。まことに太い大木がズボッと村内に立っている。巨大木というのは、まさに立っているだけで見事な存在感がある。人々は木から少しはなれたところにあるベンチにすわり、しげしげとこの大木の大きさを感じる。

私はこれまで世界各地で大木をみてきたが、このカウリの木は背が低いせいか、他の地域とは異なったどっしりとした存在感が強い。感じとしては屋久杉に近いが、もっと乾燥していて、全体に乾いた印象をうける。じっとみていると、ナカナカ席をたつことができず、吸い込まれそうな霊力を感じてしまう。

この木々をみて、北の岬まで走る。砂利道で、ニュージーランドの北端は風が強く灯台がある。急斜面である。夕方になり引き返し、半島中央部付近に泊り、翌日カウリの博物館をみる。これがよくできている。ニュージーランドで感心するのは大木がよく残っていることと、こういった博物館が充実していることである。内部には巨大なカウリの大木が伐採される様子から生態までさまざまな情報がえられる。日本にこのような優れた木の博物館がつかれないのは情けない気がする。あと数日かけて北島の北部から中部をみ、最後にコロナデル半島の植生をみてクライストチャーチへ飛ぶ。

ここでもすぐレンタカーを借り、町へ入らず南下。南の景色のいい道を通して、ミルフォードサウンドへ入る。南極ブナが大きく美しい。フィヨルドのクルーズをおえ、クック山へ向う。湖のむこうにそびえるクック山は標高こそ3,000 m級だが、これも存在感のある山である。宿をとり、ホーリー谷の山をみつつ歩く。氷河からの清流が美しい。翌日

は西海岸にぬけ、海岸沿いの湿地林をみ、翌朝カスケード谷へ入る。この谷はあまり知られていないが、これまででみたもっともすばらしい谷であった。木性シダ、厚いコケ、南極ブナの森が高い空中湿度の中、緑したたる風景を展開していた。

ここから海岸沿いに中央部のホキティカの町まで出る。ここは工芸の町でもあり、青玉、ガラス、刃物、布など多くのみるべき作品がならんでいる。ここから山ごえでアーサー峠をこえてクライストチャーチに戻る。途中、南極ブナの根株の部分でつくったツボをつくる職人の店に立ち寄る。ヤニと木目が相合して、見事な表面仕上げである。買えない額ではなかったが、もうモノは増やさないと決めていたので、諦めつっぱしる。シンガポール経由帰国便で、エチオピアから帰ってきた福井勝義と同じ便になる。こういうことも珍しい。

帰国後、岩波新書のゲラが届き、最終のツメをおこなう。なんとか退職の日までには間に合いそうである。2月のはじめは部屋の大整理をおこない、できあがった倉庫へ9割分荷物を運ぶ。2日にわたって雪の中、将積、加賀、高橋、シシルらががんばってくれる。

2月6日、小川房人さんが亡くなり葬儀。熱帯研究の草分けの一人で随分とお世話になった。山倉さんがいい弔辞をよむ。

ウズベキスタンへの道

2月10日、阿部さんとウズベキスタンへ向う。この国も長年の夢であった。探検部の学生時代、みなこのあたりへいくことを夢みていた。タシュケント、サマルカンド、ブハラなど、歴史的都市の名前をきくだけで心が躍り、いつかはいくぞと思っていたのがやっと停年直前になって実現した。地域研の帯谷さんの旦那さんがウズベキスタンの有名なカメラマンである。タシュケントで落ち合い、旅の相談をする。国内をすみずみまで歩いている彼はさすがに事情に詳しい。セダンの車を借り、運転手、通訳つきで西へ向う。まずサマルカンド、そしてブハラの遺跡群をみて、西の砂漠へ入る。今回のもっとも大きな目的は歴史都市もさることながら、アラル海の干上がり方を見ることである。アムダリア川の流

域に綿花畑ができ、これが原因でアラル海への水がなくなりはじめ、今は完全に干上がっているという。その現場をみるがために、ひたすら西のアラル海まで走りつづけ、やっと到着。湖岸から、かつては青々とした水をたたえたであろう現場は今は全く水はなく、砂漠と同じ状況になっている。はるかに一そうの鉄舟が残っていたのでそこまで入る。赤茶けた舟は静かに砂の上にかんんでいる。他にもたくさんあったそうだが、政府があまりに話題になるのでみな撤去したそうである。

アラル海は、世界の環境問題のもっともドラチックな一面を示す典型的な例である。ウズベキスタン側は、たとえアラル海が干上がろうとも、国にとって綿花はもっとも大事な産物であるので、畑はドンドン増やすという。そのためのかんがい用に大型の運河を次々とほり、水はこの運河を通じて、綿花畑にしみこんでいく。その分、アラル海への水はさらに少なくなっていく。

この問題はアラル海という大湖が、周辺の作物栽培によって人工的に干上がった珍しい例である。氷河をいただく山から湖の間には、多くの人々が暮らしている。その人々の生活を支えるために、運河はどうしても必要なものなのである。しかし、そうはいっても、湖という巨大な生態系が干上がることによる周辺への影響もはかりしれない。政治問題、経済問題が環境問題として突出した重要な事例である。

現場をみて、やはり人間の欲がすべてを奪い去っていることを痛感する。ウズベキスタンはソ連邦から独立したとしてもまだまだ貧しい国である。周辺の国々も同じく貧しい。そんな国同士がお互いの利



写真2 干上がったアラル海に残された船

益のために争い、結局は湖が犠牲となる。そしてそのさらなる先には、より深刻な環境問題がまっているだろう。

私達は雪とみぞれまじりの寒空の下を走りつつ、この一帯のことをおもった。東南アジアのあたたかさのない貧しいこの国はどうなっていくのだろうか。今ある遺跡群と、アラル海と砂漠を結びつけて、エコツアーを少し型のかわった方向から立ち上げていくのもひとつの方向であろうなどとおもいつつ、この地域をあとにした。東南アジアのように辺境の地域ではなく、このあたりはまさに世界の歴史が東西から交差した文明の十字路である。われわれ日本人のような島国人にはもっとも苦手な広大な地理的なひろがり長い歴史を秘めている。正直いってここをやらなくてよかった。東南アジアはやはりいいと変なところで東南アジアの良さを再認識したのである。ともあれ、はじめての旧ソ連圏の旅は、冬の寒さもあって、きわめて心に凍てついたものとなったのである。

京大国際交流課目でタイへ最後の旅

京大はフィールドワークに関しては日本でもっとも古い歴史をもち、探検大学としてその名をはせてきた。ところが、いざ学生のための国際交流となると、何ら組織的なものがなかった。教官が自分の研究のために世界を歩いてはいたが教育面ではきわめてお粗末であった。他の大学とりわけ私立大学ではいくつもの海外メニューをくみ、それが大きな人気となっている風潮がここ10年以上つづいている。そんなことから京大でも国際交流課目をつくろうということになり、2005年度からはじまった。相手国は中国とタイということになり、タイではカセツアート大学と交換をおこなうことになり、その最初のケースを私がやることになった。実はこの人事は私が留守中に勝手に決められていたことであったが、私は一度こういうことをやってもいいとおもっていたので、停年を控えた忙しい時ではあったが引き受けることにした。条件として若い動きのいい人をつけてくれるということで、助手の柳沢さんがやってくれることになった。出発までに二度カセツアートと交渉した。ルートは、丁度、東南ア研へ客

員できていたボンサックさんに原案をつくってもらった。かれはカセツアート大学教授で、かつて私と机をならべて博士コースをすごした友人である。日本からの森林関係のミッションを一手に引き受けていて、どこへいけばいいのか、全部知り尽くしている。かれは即座に綿密なメモをつくってくれた。はじめは20日間の予定であったが、長すぎるというクレームがつき2週間になった。またはじめは森林や環境問題が中心であったが、いろいろな学部 of 学生がいることで、農業や社会経済のことも加味することになった。カセツアートとは大会議室で2度にわたり交渉した。相手側は何十年もこの時をまっていたと大歓迎であった。問題は金の出し方で、はじめは日本人がタイへいった時は日本人が負担するように考えていたが、日本は物価が高いので、タイではタイ側が日本では日本側がすべての経費を負担することで落ち着いた。カセツアート大学はこれまでもいろいろなミッションをむかえており、こういう仕事には日本より慣れているのである。

しかし、いざ契約がおわってもナカナカ事は動かなかった。ボンサックさんはアチコチかけあってくれて、背中をおしてくれた。相手側の国際交流係もやっと重い腰をあげ、下見のエキスカージョンをして、やっとOKがでた。出発直前にはタイ関係の先生の授業をし、いよいよ出発となった。

2006年3月6日、関西空港で集まることになって、少しはやくいていた私のもとに一人、二人とさみだれ式に集まってきたが一人が、ギリギリまでこない。携帯によると、寝過ごしてはるか1台遅れたという。それでもギリギリすべりこみセーフで何とか間に合った。

バンコクへついて、早速相手側と会食。翌日はカセツアート大学での合同会見。相手側も副学長から、このあと日本へやってくる学生もまじえて交換。一人一人自己紹介するのだが、日本人学生の自己表現の下手くそさにびっくりする。

それから2週間かけて東タイから北タイへ上り、又南下してバンコクにもどるまで、2台の小型バスに分乗して、いい旅のはじまった。カセツアート側も若いい先生がついてくれて、毎日の場から場への移動のバスの中から現場での話しまで、順調に進んだ。チェンマイではかなりいいホテルに泊めても

らい、学生達も御機嫌であった。最後の海岸近くで、いささか古いゲストハウスに泊ったが、ここでは昔風の水おけに水のためであるところから水をくんで頭からかけるというタイプであった。水おけの中には、水あかのようなものもみえていたので、かなりの女子学生達は、ヌレティッシュで体をふくというのでガマンした。これには私も驚いたが、現代のように清潔過剰な日本の生活をしている分にはやむをえないと思った。

無事みなバンコクへつき、最後の交流の場ではみな見違えるように明るくしゃべった。たった2週間の旅でこれだけ人はかわりうるものだという証拠のようなものである。われわれはわかれを惜しみ、空港では出発ゲートの前で、何十分も写真のとりあいとなった。そして5月に今度はタイ側がやってきた。タイへいった学生達が手分けをし、エキスカージョンについていて学生達の交流を深めた。私も一日京都を案内し、さいごは家にきてもらってパーティをした。狭い家に20人近い人が入り、遅くまで楽しんだ。さいごの送別会の席でも、タイでの帰国の時と同じで、若い人同志、ナカナカわかれようとはしなかった。こうして、この国際交流課目は無事終った。東南ア研ではかつてタイで夏季講座を開いたことがあるので、これは二度目である。やってみ

て、やはりこういった取組みはどんどんやらなければいけないと実感した。日本の講義とはちがいで、2週間ビッタリと合宿し、次々と違う場を訪れるということは若い人に実に新鮮で深いインパクトを与えるものである。今はやりの孤立化などということなしに、一つの集団が与える効果は極めて大きい。学部も進路も皆ちがうので、この集まりを将来もつづけてほしいと私は切に願っている。

停 年

そして3月31日に私は無事停年を迎えた。無事とかくのは近頃は停年までまですにさまざまな理由で頓挫する人が多いからである。何よりも健康でしてくれたことはうれしい。家内もひそかに停年まで何もないことを祈っていたようである。退職の講演は京大会館で、これまでの自分の歴史を森を中心に話し、未来に美しい世界をつくることで結んだ。気がついてみると部屋いっぱい到大勢の人が立ったままできいてくれた。

パーティはその日の夜、ブライトンホテルでやった。この準備には東南ア研の女性達が大奮闘してくれた。研究部連絡室の河合さん、西尾さん、田畑さん、図書の北村さん、秘書の片岡さん、情報処理室



写真3 退職パーティ 二次会——東南亭にて

の奥西さんや浜元さん、井出さん、斎藤さん、山口さんなど、はれやかな雰囲気の中、日本語と英語をまじえた国際色豊かなものとなった。先輩の荻野さんと、生け花の辻井博州先生、サラワクの Lee さんと Kedit さんに挨拶、能の豊嶋三千春師に高砂、そして吉良竜夫先生に乾杯をお願いした。式の間に各地にちらばる懐かしい人々のメッセージが動画入りで入り、また間に友人達の挨拶も入って楽しく式は終わった。取り仕切りは院生の鈴木伸二君ががんばってくれた。

そしてさらに東南亭で二次会をやるというので、家内がやいたケーキをわけ、学生達がつくったエスニック料理を楽しんだ。いただいた多くの花束をわけ、長い一日はおわった。岩波書店の浅枝さんに世話になった「科学」の連載も終わり、太田さんの努力で岩波新書『世界森林報告』も間に合い、阿部さんや飯塚さんらの世話でチモールのコーヒーを引き出物にしたこともわるくなかった。

停年後の一年

4月からは別の人生がはじまる、といいたいところだが、まだ整理のできていないスライドがたくさんあった。これをキチンと整理し、CD にやいて東南ア研に保存しておきたいと思い、4月以降も名誉教授室で仕事をつづけた。6、7月は九州のAPUで客員教授として教えはじめた。先輩の福井さんが

声をかけてくれたもので、この大学の半数は世界70カ国からの留学生である。別府の高台にあり、さまざまな顔をした留学生が集まっているのをみるのは楽しい。私は日本語と英語で環境問題について教えた。準備は大変であったが、これも片岡さんが助けてくれた。

夏休みに入って講義から解き放たれ、8月21日から、今年でおわる田中科研でスラウェシへでかけた。主として中部山岳地帯に入り、ここでの沈香と黒檀について調べた。そして、ジャワへわたり、スラバヤとプロボリングで調査、その後スンパワへわたってシンガポール経由で帰国した。

帰国した翌日はまたインドネシアのボゴールへ向い、北大の拠点大学のシンポジウムに出席。10年つづいた中カリマンタンのプロジェクトの最後の国際シンポジウムである。大変いいプロジェクトで、50代の中心メンバーと若い学生達、それにすぐれたカウンターパートの存在で、出色の成果のでたプロジェクトであった。会議の間に、ボゴールのハーバリウムで沈香の標本を調べる。このハーバリウムも私が留学した1969年からここにあるのだが、翌年にはチビノンへ引っ越すことになっている。ボゴールの植物園とハーバリウムが分離されるのは残念だが、跡は自然史博物館のようなものになるというのでわるくはない。この思い出多いボゴールの町も徐々にかわっていく。いささか感傷的になりつつ、ボゴールの町をあとにした。そして1日おいて今度は中国桂林での生態人類学のフォーラムである。古い友人の尹紹亭さんがやっており、はじめての会合なので是非ということでのることにした。桂林は1990年以来だが、観光客の数が格段に増え、町もきれいになり、また近くの棚田も観光客用に整備されていた。中国ではまだ生態人類学をやる人は少ないが、重要な分野でその材料は山ほどあるので、これから毎年ひらくことになった。地球研の秋道さんや京大地域研の阿部さんなどと同行した。

中国から帰り、1日おいて東欧の旅にでた。ドイツへ入り、ポーランドからバルト三国をへて、ハンガリー、チェコ、スロバキア、オーストリア、スイスとまわって丁度一カ月でもどる。旧友のワルターと会い、新しく改造中の家を見、またスイスに住む絵画好きの友人の家も訪ねた。かれは浮世絵や地元の



写真4 スラウェシの黒檀の大木



写真5 ポーランドのベロベンカヤブッシュ国立公園の森

画家のコレクターとして知られ、現代絵画も集めている。大きな地図ケースの中に、大事な絵画をしまっていて、一枚一枚楽しみもって見せてくれる。いとも気の合う人はどこにもいるものである。

11月はスライド整理。12、1月はAPUの講義となり、2007年2月に入って安藤科研でアッサムへ出発。新しくなったバンコク空港での待時間にこの原稿のつづきをかく。

アッサム

アッサムではアルナチャルの周辺をまわった。昔、中尾佐助さんが、次はアッサムをねらえ、などといわれていたが入域が難しく、やっとこの年になって実現した。カルカッタからローカル線に乗り換え、グワハティについてすぐ、ジープでジロへ向う途中、二泊して標高2,000mの峠をこえ、少し下ったジロは美しい水田と竹林、それにブルーパインにかこまれたすばらしい盆地であった。とりわけ水田のアゼづくりがすばらしく、安藤さんがよくが



写真6 インドアッサムの照葉樹林

んばって調査していた。竹林は京都の竹林のようによく手入れがされ、そのまわりにブルーパインの大木が林立していた。どんつきまで歩くと、1,600m少しのところから照葉樹林があらわれた。少し足をのばしてまわりをみると道からはなれた山地には見事な照葉樹林が残っていた。ブータンからミャンマー、そしてこのあたりがやはり最後の残された照葉樹林なのである。最後にはカジランガ国立公園でサイの子連れをみることができた。長い間、アフリカやジャワでサイに接する機会はあったが、子連れははじめてであった。しかも6頭の子連れと、1頭の雄サイをみることができたのは、さすがにアッサムならではのことで、この次はナーガランドへくるべしと、インドをあとにした。

ニュージーランド

ニュージーランドでは去年いけなかった南島の北部分を中心にまわり、数々の南極ブナ、ポドカルプスの森を歩いた。朝2〜3時間、昼から2〜3時間を森の中ですごし、間に1日平均400kmを走った。森は山の中になるため、最後はいつもホコリっぽい砂利道を走っていくことになる。この道をぬけると、どこも実に美しい森と川、そして山があった。ニュージーランドの景観は日本と同じでこじんまりしていて、しかも存在感がある。なによりもいいのは、日本のように人が多くないことである。道を走っていても車は多くない。森へ入れば、ほとんど人に会うことはない。じっくりと一人で、南極ブナの美林にひたりきることができる。

最後は去年みて、もう一度みたいと思っていた南西部のカスケード谷や付近の湿地をみ、アスピリン山の森をみた。氷河から流れ出る激流のそばに南極ブナが大きく広く生育していた。

あとニュージーランドでみていないのは北島の東半分であるが、全体にいい森は西にかたよっている。オークランドの空港に入ると、3月のこの地は日本人の若者短期留学生組と退職者のグループツアーでにぎわっている。私のように一人で人のこない森にいくような物好きはめったにいない。若い人はもう少し一人で動くようにならないものか、などと思いながら、日本への帰路についた。

おわりに

ニュージーランドからつぎのオーストラリアへの間の3日間の間に、アーカイブのあつまりで「多雨林世界の時空間」というテーマで熱帯多雨林と温帯多雨林の映像をもとにしゃべり、2日目は東京の長尾財団の評議員会に出席した。この財団は、20年前から東南アジアの自然研究を目指す若者に奨学金を出したり、またかくれた研究者の仕事を助成したりしている財団で、私は設立当初から、佐藤大七郎さんのお誘いで参加している。当時はまだこういったボランティア的財団はめずらしく、海外では今も非常に高い評価をうけている。

3日目は、かつての同僚の桜井さんの退職記念講演と祝賀会があった。かれとは助手時代を安成さんや山影さんと共にすごした仲間である。当時は昼からはつねに安成と3人でコーヒーをのみつつだべっていた。夜はおそくまで各自仕事をしていたが、土壌の久馬さんが毎日二つ弁当をもってきて、夜11時頃までがんばっておられたので、私は久馬さんが帰るまではいるようにしていた。ところが最近、福井さんにきいたところによると、夜はもっぱら二人で暮をうって遊んでいたという。時には帰りに市村所長ものぞき、こっちやったらとかちょっかいを出して帰っていったという。当時の話で有名なのは、自然系の連中は常に荒神橋の麻雀屋に出入し、用事があると所長秘書がよびにきたという。

古きよき時代の話であるが、今皆忙しくなりすぎて、こういった時間をとる余裕は全くないだろう。しかし、どちらが学問的に生産力が上ったのか、考えさせられるところである。

3月17日からは停年後の一年のしめくくりとして、オーストラリアへ向った。かつて、パースのマードック大学のジムウォーレンさんがセンターへ客員できていたが、かれをたずねることと、パースから南400 kmの地点にある巨大ユーカリ林をたずねることが目的である。1週間たらずの短い期間であったが、ウォーレンさんと旧交をあたため、かつ念願の巨大なユーカリの森を歩くことができた。

帰国の翌日は民博の山本さんの退職記念パーティである。昼にシンポジウムがあり、夜は秩父宮賞の

お祝いの会も含めたパーティがあった。探検部の同輩でもあり、共にアンデスやブータンへいった、仲間である。この数年の間にバタバタと古い友人が退職することになった。こうして退職後の1年は終了した。

この2年間を振り返ってみると、最後のがんばりというのはけっこうきくものだというのである。当初おもっていた300日には達しなかったが、ほぼ目的は達せられた。また、停年後はもうあまりがんばらないぞと思っていたが、2007年4月1日で、これまでの海外調査が98回に達する。あと2回で100回である。100回というのは、よくいく人にとっては大した数ではないが、私にとってはひとつのターニングポイントである。吉良先生は停年のパーティの時に100回といわず、150回でも200回でもいいって下さいと励ましてくださった。動きを止めるのは簡単だが、一度とめると、次に動き出すのはおっくうになる。やはりある種の力を常にたくわえて前向きにいくことがフィールドワーカーには求められる。幸いにしてまだ体は大丈夫である。それにまだまだ行っていないところは多い。10年前にあげたところはすべてクリアしたので、あとまた行きたいところをあげてみたら、すぐ30カ所くらいになった。これからはもう少し体力と時間を考えて、やっていこうとおもう。それに是非もう一度行っておきたいとおもう所も多い。時間がたつと場は大きく変わる。その変化をみることは地域研究にとって重要なことである。

少なくとも東南アジアに関しては40年の変化をみてきた。しかし中国は、南米は、中東はまだまだほんの数回いったきりである。これからも機会をみつけて、いかなければならない。もしこの辺で足を止めてしまえば、やはり死ぬ時に後悔するだろう。

一方で、たまりにたまったデータや本やスライドをどう生かしていくか、これも大きな問題である。さらに若い人への関心もつづけたい。そんなことをおもうと、けっこう忙しくなる。事実、停年後の1年間は、会議という必要悪がなくなったため、もっとヒマになるとおもったが、そこへこれまでできていなかった仕事を集中させたため、ほとんど休む間もなく働いていたような気がする。好きなことだけやっているのだから気分はすこぶる良い。

これからの課題はフィールドをできる限りつづけるかたわら、つみのこしのデータを処理して、着々と世に出していくことである。書庫に眠るフィールドノートがうめき声をあげているような気がする今日この頃である。そして、自分の仕事だけでなく、その他もろもろの趣味の世界に生きることも忘れてはならない。昨年のスラウェシの旅でパルの町に17年住んで黒檀の仕事をされた京都育ちの井上さんに会い、さまざまないいお話を伺った。その縁で、念願の黒檀の中国風セットも手に入った。この椅子にすわり、沈香をたき、中国茶や酒をくみかわして親しき人々と歓談する時間をとることが今一番の夢である。そんな日がやってくるのを夢にみつつ、少しでもすき間をあけようと、山積みのガラクタに途方にくれているのも真実である。

最近いつも調査にでておもうことは、いかなる人生の終り方をするかである。いつも夕方になると熱帯ではすばらしい夕焼けがはじまり、やがて、真っ暗な世界になる。この暗い世界に入る前の一瞬のかがやきを、どれくらいにするのがいいのか、私は常に、各地の夕焼けの風景をみて考えている。これまでもっとも感動的であったのは、バリの海岸の夕焼けと、カリマンタンの泥炭湿地林でみた黒々とした重みのある夕焼けであった。そして今年度の最後の旅でみたユーカリの古木はすばらしかった。数百年をへて幹は傷だらけ、樹皮だけを残し、かろうじて生きている。大枝が枯れ落ちるが、その下からまた若芽を出している。老木のコブの上には他の若木も着生している。しぶとく、上は枯れても、また若い世代を、年老いた自分のまわりに育てている。私はこの老樹に接し、今後の人生はこれだと思った。



写真7 オーストラリア ユーカリの古木

私の仲間も次々と退職していった。しかし、退職後はまた別の新しい道を歩んでいる。研究者の仕事は死ぬまで続く。それまでいかに持続させることができるか、古木が教えてくれた。

その後の半年

2007年度に入って、今度は、また忙しくなってきた。新しく出した科研が通り、4年間「稀少生態資源とエコポリティクス」というテーマでまた動くことになった。今回は年寄りは一りで、あとは、これまで各地で一緒に仕事をしてきた若い人々が中心である。近頃の申請書にはエフォートという欄があり、ふつうは、10%くらいしかみな書かないが、私は80%とした。APUで教える以外、全力をこの科研に投入することにした。あとで知ったが京大の名誉教授としては4件のうちの1件らしい。もっとも理学部のように名誉教授はできるだけ大学に近づくとシャットアウトしているところもあるらしいので、全体像はわからないが、現役をしりぞき、雑用から解放されて、はじめて、研究らしい研究ができるのではないだろうか。幸いにして、近頃は老後の人生も長くなっている。せっかく国民の税金で育てられた人生を、最後にもう一度、がんばって動かないと申し訳ないではないかと私自身はおもい、4、5月はAPU、6月は日本熱帯生態学会、7月からはシリア、オマーン、8、9月はインドネシア、マレーシアへ100回目のフィールドワークを行った。記念にキナバル山へ登るつもりが、シンドラーのエレベーターに閉じ込められるという事故がおこり、来年にもちこすことにした。そして10、11月はタイ、ラオスとフィールドをつづけている。今回のテーマは失われゆく貴重資源をめぐる人と人、国と国との動きをおっていく予定である。

地域研究の最終段階は、自分の得意とする地域をこの地球上でいかに位置づけるかである。その作業なくしては、地域研究はおわったとはいえない。しかし、世界は広い。寿命がつきるまでにいかに終わらすかが問題だ。